



死体の行方

死体の行方

「かわいそうじゃないの？カズくん冷たい人ね」

小学校のお昼休み、クラスみんなに柔らかく罵倒され、帰りの会の後、みんなカズを置いて下校してしまった。カズは自身の犯した間違いを糾弾されても、何が駄目だったのか分からず、弁明の余地さえもらえなかった。

クラスの大半が住む地区と少し離れたところにカズの家があるので、下校時間のほとんどは一人なのだが、こうして一人にさせられると、さすがに寂しいとカズは感じた。

今の僕の方が可哀想な気がする。

きっかけは給食中の女子の発言だ。日本一長寿の双子のお祖母ちゃんがいて、そのどちらかが今朝亡くなったらしい。生きてる方を指して、みんな口々に可哀想と言っていた。かわいそうにね。さびしいよね。そんな空気の中、カズは「かわいそうは違くない？」と特に何とも思わずってしまったのだ。味噌汁を飲み干し、顔を上げると、女子達の冷たい視線がカズを突き刺していた。

可哀想ってのはなあ。やっぱり違うよなあ。カズは何処かで落ちていた石をサッカーボール代わりに蹴りながら歩いた。

蹴った石が、人に当たった。人は道路の上で倒れている。髪は短く、Tシャツの裾から逞しい二の腕が見える。男の人だ。肌の色が悪い。死体だ。

また増えている。こここのところ、増える一方だ。

今朝、道路に転がっている死体を数えながら登校した。五十四体あった。この死体は、今朝はなかったはずだ。こんな道路の真ん中で大の字で倒れている死体なんて、忘れるはずがない。

昔は、週に一体転がっているかどうか、程度のものであったらしい。お祖母ちゃんと言っていた。それが景気やら何やらで、今では一日に何体転がるか分かったものじゃないと。偉い学者が、死体の増加量と環境汚染の深刻度は比例しているとテレビで叫んでいた覚えがある。景気だろうが環境だろうが、僕の通学路を塞がないでほしい。

カズは死体に触れないように壁際をそーっと歩いた。死体は動かないが、カズがバランスを崩して死体に触れ、さらに運が悪いことにそれを学校の生徒に見られたら、何を言われるか分からない。隣のクラスの子が「死体菌が移るぞ！」と言われて避けられたのを見た。

やっぱり増えている。大通りに出ると今朝よりもカラフルな町が見えた。死体が思い思いの色の服を着て（自分で着ているのかは分からないけど）道路に転がり、町に彩りを与えている。見方によっては綺麗な光景だが、その実、死体が原因だと君が悪いだけだ。カラフルな虫の表は綺麗でも裏から見たら身体の節がグロテスクに見えるのと同じ気がする。

歩道と車道を遮る柵の上で仰向けに寝ている死体と眼があった。眼も口も開きっぱなしだ。なんだよ、と言っている気がして、眼を逸らした。あれ。カズはもう一度死体を見た。死体を触ったことはない。触ったらいじめられるから。先生が言うには、死体は冷たいらしい。同級生が僕を冷たい人と呼んだのは、あれは死体と同じだと言いたかったのだろうか。

「君とぼくは同じらしいよ」

眼と口が開けっぱなしの死体が、今度は驚いたように見えた。そんなわけないだろ。と言っているようだ。ですよ、と僕は返す。

手袋をしたおじさんが死体を店の前から移動させている。燃えないし、中々腐らない死体は、ゴミ収集車は集めてくれないらしい。テレビでゴミの偉い人が「管轄外だ」と言って、周りからブーイングを浴びていたが、多分、偉い人は間違っていない。

カズが玄関の小さな外門を開けると、気をつけの姿勢でうつ伏せに寝ている死体が転がっていた。なんて邪魔なんだ。この外門と家の扉の間の小さなスペースに、君はなんで転がっているんだ。カズは心のなかで罵倒しつつも、郵便受けの中から紐を取り出し、死体に触れないように気をつけつつ、紐を引っ掛けて、死体を外に引きずりだした。以前、母が同じ状況に遭遇していた。その日は僕がおやすみと言うまでずっと、母は玄関の死体を罵倒しつづけた。そこまで怒らなくてもいいのにと、あの日は思ったが、なるほど、疲れて、やっと家に着いたと安堵した直後にこんな場面に遭遇すれば、誰でもあんなふうになる。母が次あった時のために郵便受けにロープを入れてくれて助かった。

カズはロープを郵便受けに戻し、玄関で靴を脱いだ。ふと、家の中まで死体があったらどうしようとそわそわしたが、死体はなかった。

冷蔵庫から紙パックのりんごジュースを取り出し、家に誰もいないことを確認して、紙パックの注ぎ口から直接飲んだ。

あの道路の死体が、一体だけでなく道をふさぐように敷き詰めてあったら、どうしよう。

迂回すればいい。通学路からはみ出るが、一つ向こうの道路から曲がればいいだけだ。そもそも、うちの狭い玄関先だから、死体が一体転がるだけでふさがってしまうわけで、道路が塞がることはまあ、無いだろう。

ん？道路を塞ぐにはどれくらいの死体が要るんだろう。カズは紙パックから口を離して、ゲップをした。気になることがあったら、その日のうちに調べろと父が言っていたことを思い出し、カズは三十センチ定規をランドセルから取り出して、外へ向かった。

外門を開けると、先程の死体がうつ伏せで転がっていた。カズは側に寄り、三十センチ定規を、両手で持ちながら、できるだけ死体に近づけた。なるべく正確な大きさを知りたいけど、触るのはマズイ。こういうのは大体でいいと思う。

定規を何となく合わせたところ、死体は長辺百七十センチメートル、短辺六十センチメートルってところだ。カズは、空を見上げた。掛け算をすると、一万二百平方センチメートルだ。多分、合ってると思う。暗算は苦手だ。

死体一つにつき、一万二百平方センチメートルの地面を使うようだ。カズは家に戻り、開きっぱなしのランドセルから社会の教科書を取り出した。

確か、前の方のページだったはずだ。

あった。日本の面積だ。三七七九九……平方キロメートル？

カズは目をつぶった。なんてことだ。単位が違う。センチメートルじゃ歯がたたない。

確か、同じ単位にする方法があったはずだが、授業で先生がそのことを話してる最中、カズは

教科書の後ろの方にある漫画に夢中になっており、まじめに聞いていなかった。

仕方がない、明日、友達に聞いてみよう。カズは社会の教科書を投げた。

「え？キロメートルとセンチメートル？」

教室に入り、隣の席の子に聞いた。

「うん、面積の単位を一緒にするやつ」

「なんだっけなあ、えとね、0が二倍要るんだよ」

隣の子がノートを開いた。きれいな字で、授業の内容が書かれている。勉強する子だ。

「あ、そうそう。センチからキロになると、○が五個消えるから、面積だと十個の○が消えるよ。逆だと、十個増えるね」

十個も増えるのか。計算するのが面倒だ。カズは机の下からノートを取り出して、鉛筆を持った。

「じゃあ、三百七十七万九千九百平方キロメートルは……」

「なに、その数字？長いね」

「日本の面積だよ」

「一万二百平方センチメートルは？」

「うちの前にある死体の面積」

「カズくんって悪趣味だね」

「昨日も同じようなこと言われたよ」

単位を合わせて割り算すると……

「数字が多すぎてよくわからないね」隣の子の言葉でカズの鉛筆が止まった。

「もっと身近な面積にしよう。うちの町の面積わかる？」

隣の子は席を立ち、教室の後ろにある本棚に向かった。前かがみになって、本棚をしばらく睨んでると、一冊の本を持って返って来た。

「ほら、うちの町の歴史の本」

「ああ、あったね、そんなの」

隣の子がパラパラとページをめくると、果たして面積は見つかった。「二百七十三平方キロメートルだってさ。あ、うちの町、日本で一五〇位の大きさなんだって」

「計算すると……約二億六千七百万くらいかな」

「土地の面積を死体の面積で割ったから……死体の数？」

「うん。大体二億六千七百万体の死体があったら、町が埋まる」

「それ、計算して何か意味あるの？」

「意味はないけど、昨日、玄関に死体が落ちててさ。通れなかったんだ」

「カズくんの家、何人家族だっけ」

「三人だよ」

「じゃ大変だね」

そうかな。適当に相槌をうち、カズはノートに視線を戻した。日本に住む人は二億もいなかった

たはずだ。こんな小さな町でも、死体で埋めつくすのは無理らしい。人もたくさんいて、死体もたくさんあって、それでも埋まることはないんだな。

カズは窓の外を眺めた。日本人の最後の一人が死体になっても、この町が埋まることはない。なのに僕の通学路は死体がたくさん転がっている気がするのは何故だろう。

気がつくと、同級生がたくさん教室にいる。このノートが見つかり、また何を言われるか分からない。カズはノートをさっと机の下に戻し、隣の子に礼を言った。